

〔東海道中〕^上 藤栗毛三編^上爰にかの彌次郎兵衛喜多八は、大井川の川支^{づかへ}にて、岡部の宿に滯留せしが、今

朝御狀箱わたり、一番ごしもすみたるよし、聞とひとしく、そこく^〇に支度して、^中大井川の手

前なる島田の驛にいたりけるに、川越ども出むかひて、だんなしゆ、川^アたのんます、彌^二きさま

川ごしか、川ごしハイ今朝がけにあいた川だんで、かたぐるまじやあぶんない、蓮臺でやらすに、

おふたりで八百下さいませ、彌^二とほうもねへ、越後新瀉じやアあんめへし、八百よこせもすさ

まじい、^〇中問屋へか、つて、おこしなさるはト、ばい、すて、あし、彌^二ナント北八、あいつらにか

らかうがめんだから、いつそのこと、とい屋へか、つて越そふ、手めへの脇指を借しやれ、

北八なせどふする、彌^二侍になるは、^下きた八がわきざしをとつてさし、おのれがわきざしのひ

か^ふに見せ、彌^二ナント出来合のお侍、よく似合たるふ、此ふるしき包を手めへいつ^〇玄よに持て供

になつてきや、北八こいつは大わらひだ、ハ、ハ、ハ、^下彌^二次郎兵衛がにもつかけ、やがて川問屋に

いた^り、彌^二次郎兵衛、おくに、彌^二コンリヤとん屋ども、身ども大切な主用で罷通る、川ごし人足を頼

むぞ、^〇いやハイかしこまりました、御同勢はおいくたり、^〇中上下あはせてたつた貳人じや、臺

ごしにいたそう、なんぼじや、^〇いやハイおふたりなら、蓮臺で四百八拾文でござります、彌^二そ

れは高直じや、ちとまけやれ、^〇いやエ、此川の賃錢にまけるといふはないヤア、ばかアいはす

とはやく行がよからず^〇に、^〇下

〔紫の一本^下〕^〇三文渡^〇し。

靈巖島より向島への渡なり

〔淺草志^一〕御厩川岸渡し 本所中の郷へ渡る

古へ此處に御厩有し故の名也、淺草三好町、渡^〇錢^〇壹^〇人^〇二^〇文^〇づ、渡舟は人數十人に限ると云、